

その分岐動脈だった。主に 5-FU を使用し、1 次症例で 77.8% の CR 率であった。1 次症例 9 例中 7 例に放射線療法を併用し、85.7% の CR 率を得た。抗腫瘍効果と副作用の点から DDS は全身状態不良あるいは超高齢者の有効な治療法である。

#### 27. 当科過去 5 年間の口腔癌一次症例における予後不良症例の検討

神津由直, 高山謙一, 宮川昌久  
(千大)

当科における過去 5 年間の口腔癌 1 次症例における予後不良例について検討した。対象は 162 例のうち手術症例 141 例のうち予後不良例の 8 例である。8 症例の全てが stage 4 であり半年以内に再発し 1 年以内に死亡した。原発巣は下顎歯肉, 舌であった。再発部位は喉頭上断端, 側咽頭であった。今回は TNM 分類, 原発部位, 治療法, 輸血の有無, 再発部位による項目について検討した。

#### 28. 口腔内出血が契機となり判明した血液疾患の 4 例

甲原玄秋 (千葉県こども)

口腔内出血が初発症状の 1) 14 歳男児の前骨髄性白血病, 2) 5 歳女児の特発性血小板減少性紫斑病, 3) 2 歳男児の血友病 A, 4) 8 歳男児の血友病 B の 4 例を経験した。1, 2) は歯肉, 3) は舌, 4) は膿瘍切開部からの出血であった。1), 2) の血小板数は  $1 \times 10^4 / \mu\text{l}$ ,  $0.7 \times 10^4 / \mu\text{l}$  であったがスプリントで, 3) は縫合と欠乏因子補充で, 4) はガーゼによる圧迫で止血し得た。口腔内の異常出血では適切な止血処置と, 出血性素因の迅速な解明が必要である。

#### 29. 抜歯後出血により発見された後天性血友病 (第 VIII 因子インヒビター症) の 1 例

阿部健志, 林 建一, 鶴澤一弘  
(千大)

今回我々は, 抜歯後出血により発見された第 VIII 因子インヒビターの発生と第 VIII, IX, XI, XII 因子活性の低下を認めた後天性血友病の 1 例を経験した。輸血と免疫抑制剤により止血をみたが, 出血時間の延長と抗体発生は現在まで改善を認めない。本疾患の原因として, 以前の輸血と常用していた糖尿病治療薬, 降圧剤の薬物アレルギーが考えられた。第 IX, XI, XII 因子活性の低下は長期の出血での消費とカスケードの中での低下が考えられた。

#### 30. 頬部欠損に対して胸鎖乳突筋皮弁による再建を行った 1 例

川畑彰子, 菅沼紀彦, 山 満  
(千大)

症例は 46 歳, 女性。汎血球減少症候群により当科 ICU 入院中, 頬部から頸部にかけての蜂巣炎を発症し, 消炎後頬部の組織壊死が進み穿孔し, 口腔内と交通したため欠損の修復が必要となった。

穿孔部の再建は, 手術, 麻酔のストレスや合併症, ステロイド使用による易感染性や治癒不全の危険等考慮し, 局所麻酔下にて胸鎖乳突筋皮弁で行った。

現在皮弁は生着し穿孔部は閉鎖され, 周囲とほぼ同様の色彩を呈し視覚的にも良好である。

#### 31. 自傷による下唇の広範な欠損を防止し得た Lesch-Nyhan 症候群の 1 例

甲原玄秋 (千葉県こども)  
中山 宗 (堺市開業)

1 歳 11 ヶ月の Lesch-Nyhan 症候群の男児の口腔自傷について 2 年 10 ヶ月の間, 治療と経過観察を行った。自傷により下唇の 1/2 以上は欠損する恐れがあったが, スプリントによる咬合挙上を行い, 患児のストレスの軽減をはかるように指導し, 下唇の広い欠損を防止し得た。4 歳 9 ヶ月現在, 下唇の広範な欠損を防止し得たが, 一部変形が残存している。増齢により自傷行動の減少が期待されるが, 将来唇の変形の修正が必要と考えている。

#### 32. 要介護高齢者施設における口腔ケアシステムについて

荻野 司, 道谷弘之, 井上真希  
金澤正昭 (北医療大・歯)

今回私達は, 口腔ケアアセスメント表を用いた特別養護老人ホーム入居者の口腔ケアアセスメントを行い, その評価結果の推移について報告した。口腔ケアシステムの導入によって, 入居者の口腔清掃状態, 歯の問題, 義歯の問題の改善がみられ, このシステムが口腔環境の改善に有効であることがわかったが, 歯科医師と施設の介護看護職員が行った評価には結果に差があり, 施設職員と歯科医療者との緊密な連携・協力が重要と思われた。